

伊達政宗公
誕生450年
シリーズ
第三回

仙台藩のまちづくり①

宮城学院女子大学非常勤講師 木村 浩二

広瀬川を挟んで城と町

仙台城は、天然の要害ともいえる青葉山の東端に造られました。築城時、伊達藩は、上杉方との間で緊張状態にあり、戦闘用の山城を急ぎ造る必要があったのでしよう。政宗は、水堀や高石垣で囲んだ平城ではなく、深い森や急峻な崖などの自然地形を読み、これを生かして、短い工期で難攻不落の山城を築いたのです。

広瀬川を外堀に見立て、城下町は東側の段丘台地の上に独立してつくられました。大町から名掛丁へと東に延びてゆく大手筋の通りを東西幹線に、大町三丁目の芭蕉の辻で直交する奥州街道を南北幹線に定め、城下町の東西、南北の基準線としました。城下町の街区は、この辻を中心に碁盤目状の街路によって出来上がっています。

二つの城と二つの城下町

政宗は屋敷と称して晩年二つ目の城を城下東南部に築城しました。この若林城跡は、現在そのまま宮城刑務所となっています。築城とともに家臣たちも城の周りに屋敷を移し、新たな城下町ができました。古城、南小泉地区には、若林城の向きと同じ方向の道路や土地割りが広範囲に認められ、当時の町の様子が浮かび上がってきます。最初につくられた城下町は現在の仙台駅から五橋の辺りまでで、これより東側は若林城築城以降につくられた新しい城下町なのです。政宗が町の発展を予見していたかのように、若林城の築城を契機に城下町は東南部に大きく拡大しました。

城下町仙台は、仙台城築城期の町と若林城に伴う副都心ともいえる町の二つが合体して出来上がっています。宮町から清水小路を結ぶ線を境に街路や土地割りの方向が大きく変わる仙台の町の特異な構成は、五橋の福祉プラザ前のY字路で体感できます。

消えた屋敷割りと残った町割り

町の大半を占めていた侍屋敷は、居久根と呼ばれる屋敷林で囲まれていたことから、町中が森のような景観を呈し、「杜の都」の由来となりました。太平洋戦争末期の空襲で、市街中心部は一夜にして焼け野原になり、屋敷割りは焼失して町の様子は一変しましたが、戦後の復興では街路区画である町割りの大半はそのまま踏襲されたのです。現在の市街地の多くは城下町由来の道で、城下町の名残は痕跡として街中に残っています。

仙台の中心部は、藩政期の街路が残る「城下町博物館」ともいえ、侍や町人たちの息づかいが街角の至るところで感じられます。見過ごしていた「江戸時代の落とし物」を探しに、城下絵図を手に町へ出ましょう。

●本稿では、学術研究の立場から歴史上の人名に敬称を付していません



仙台名所 芭蕉の辻図
伊藤武陵画 三原良吉考証
昭和26年刊 仙台市博物館蔵



若林城跡の航空写真
(昭和59年撮影)